

Title	質疑應答
Author(s)	
Citation	地球 (1926), 6(3): 223-226
Issue Date	1926-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183149
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

岩船郡	七、三二	相川町	七、一四六
岩船町	三、九六九	澤根町	三、三九八
瀬波町	二、〇八一	河原田町	二、三三六
村上町	八、八二三	小木町	五、六七〇
村上新町	二、二五五	兩津町	六、六六六
各村合計	六〇、〇五三	各村合計	八、一四四
佐渡郡	一〇六、六八		

質疑應答

問 廬山 (文檢)

答 太平御覽四一に曰く山高二千三百六十丈、周廻二千五百里東南至十二里張翮鑑滄陽記云、匡俗周武王時、人厭逃微眇、結廬此山後登仙空廬尚在、弟子等呼爲廬山、又名匡山、又按豫章記、匡俗字孝父、共鄱陽令吳芮、佐漢定天下、封俗鄱陽廬君、兄弟七人、皆好道術、遂寓精爽於洞庭之山、故世謂廬山、漢武南巡親見神靈、封俗爲文明公、一云匡俗漢人、廬山は山東の泰山と共に支那の名山中の名山である江西省鄱陽湖の出口楊子江畔の湖口と九江と凡三角形をなした地點に聳えてゐる一帯の花崗岩で或は海拔三千五百尺といひ、九江より十五哩、岩を鑿ち溪に橋し肩輿を通じて今は外人の一大避暑地であるが、上文を見れば昔匡俗といつた道術に秀でた七人兄弟が廬を此に結んでゐたところで、周代からの名山である、或は匡は周の人でなく漢初の人だとも云ふてゐるが朱

質疑應答

子の白鹿洞書院をはじめ、慧深法師の開基である東林寺、惠永法師の開いた西林寺、李白の詩に名高い五老峰、清小納言で名高い香爐峰などの名所舊蹟にさむのをみても、唐宋時代天下の道學者佛教徒の淵藪であつたことがわかる、こゝが今日のやうに避暑地になつたのは、九江に居つた宣教師エドワードリツルが、夏期、寺院をかつて避暑したに始まり、その中に牯嶺といふ一帯の荒廢地を租借することを考へ、一八九四年からその經營に着手した、目下二百六十軒からの別荘が建つてゐて南支隨一の名勝となつた、九江から蓮花塘まで約八哩、一人一弗位で自動車にのれる、蓮花塘から牯嶺まで七哩を四人擔ぎの山轎子にのれば四時間で登れるこの運賃二弗、九江から約四時間三弗でこの避暑地に達し得られる。學團員の一遊をすゝめる。但廬山一帯三百の寺院の址を尋ねんとすれば、それは又特別のことで常盤博士に教をうけるがい。

問 膠州堆 (奈良山本史郎)

答 これを山東の膠州と間違つてはいけない、地球第四卷第一號、日本近海の深さ(二)に於て詳述せる通り日本海の南方に於て北緯三〇度二、東經一三六度七附近にある淺堆にして、發見せる艦船の名に因みてかくよべり、この海面下の孤立せる島の頂は深さ七一〇米にして、周圍が四千米以上の深海に存する海丘である。(藤田)

問 ワラキア Wallachia (文檢)

答 ワラキアと云へば古い歐洲でダニユア河畔の公國で

あつた、一八五九—一六一年にこの公國とモルダヴィアとが合併してルーマニアといふ公國になつたのである、従つてワラキア州はルーマニアの本部とも云ふべきでルーマニアの南西部を占め、北東はハンガリーとの間にトランシルバニア山脈があり又モルダヴィアに連り、西から南へかけてダニユープ川が彎曲して之を繞つてゐる、河の對岸はブルガリアと今度ルーマニアに合併されたドブルザアである、ワラキア公國は十三世紀に創まつたのであるが、この國の紀元はさういへばダニユープを横ぎつてダキアの地に植民を廣げたローマ皇帝トラヤヌの開拓にはじまる。ローマ人の血液はこれらの邊境に於てゴート人、フン族アバル人スラフ人韃靼人をはじめこの邊塞に攻めて入つたトルコ人、マギヤール人、ポーランド人、ロシア人といつた各民族によつて亂されたのであるが、ルーマニア人は猶其言語がラテン系であることを以て古いローマのテリトリイであつたことを誇としてゐる、しかし何をいふても中世から近世へかけて戰亂侵掠の絶えない地方であるから、西歐の如くに開發が十分でない、モルダヴィアの方は土地丘陵性であるがワラキアの方は土地平坦で歐洲中尤も肥沃な農業の盛大な所であり、小麥の産が多いこの地方での穀倉である。昔時トルコ人の侵掠を恐れて、土人の家は地中に掘り込んでたてられた姿が今も残つてゐる、Cenezaが人口五萬、州中第一の都會である、ワラキアの水が流れてダニユープに入る所に首府ブカレストがある人口三十萬、バルカン地方第一のクリスチャンシチーである。(藤田)

問 リガ (文檢)

答 バルチック海東岸の新興國ラトヴィアの首府である、リガの海は冬期四週間氷結するけれども碎氷船で其不便をのぞくことが出来る、従つて東海では尤も都合のよい海港である人口も二十萬からあつてエストニアのレバルや對岸のヘルシンゲフオルスが人口十萬内外であるのに比ぶれば格段の繁華である。獨逸商人の移住開拓した町であるから日耳曼風の家屋が多い、古くはハンザ同盟の一港であり當時の古い立派な倉庫が今日にも殘存してゐる、汽車と水運の便によつて容易にドニエプル及ヴォルガの平原と交通が出来るから露國の貿易港として戰前には人口六十一萬二千、バルチック海岸で露國について第二の繁華な港であつたが戰爭と共に火が消えたやうになつたのである、今では小さいラトヴィアの首府であるから容易に舊の位置には返ることが出来ぬであらう。

問 ラゴス Lagos (文檢)

答 この地名は所々にある葡國のヴィンセント岬の東二十哩大西洋岸の古い要塞として、又歐洲トルコのタソス島の島の東の灣の名として、又は蠟國 Lagos 州の銀嶺に近い一都邑で南北縱貫鐵道の一驛であり且其教會の建築の見るべき都邑として有名であるが、本問題にはアフリカのニジエルのラゴスを尋れたものを考へて答へる、近時英領ニジエルの急速な發展は其中核としてのラゴスの繁榮である、熱帯アフリカの奴隸海岸に沿ふて大きなラグーンがあつて大陸との間に島をなしてゐる所に舊く葡領のラゴスといつた港があつた、そ

こからラケーンに入る多くの河流によつて内部への交通が出来たので、貿易の利を占めてゐた、奴隸賣買の取引も行はれてゐた所であつたが、一八五一年英國がこゝを占領し一八六一年秋に英國が土人酋長から買収してシエラレオネの知事がこゝを治めた、一八七四年には黄金海岸植民地の一部となり一八八六年にはラゴス植民地なるものが獨立した、當時ニシエル河畔に王立ニシエル植民會社が出来一九〇〇年にはニシエルに北及南の二州が成立して各獨立に支配されてゐたが一九〇六年にラゴスとこの南ニシエリアが統一され一九一四年には北ニシエルも其管轄區域に入り、英國委任統治領のカメルーンも亦最近このニシエル英領植民地の管轄となつた、茲に於て大略三三五、七〇〇平方哩千八百萬の人口を有するニシエリアの首府としてラゴスは尤も重要な地位に立つことになつた、ギネア海岸第一の海港でもあり築港もでき、上水の設備があり電氣燈の備もある、鐵道はこゝから橋で大陸に通じニシエル河畔の Jebba に通じ、ニシエル河の水運の便と驛駝隊商の便を占め、風氣全く一新した、人口凡十萬その中阿弗利加人が九萬九千まで住み、白人は一千人しかゐない、輸出品は椰子實、椰子油、木綿、コ、ア、錫、珈琲、皮革等で、天晴西阿のリバープールと呼ばれるやうになつた、無線電信局もあるし、有線電信は佛領ギホメーに通じ、電話も行届いてゐる、アフリカは近時東も西もかやうに目まぐるしく開發されてきたのである、邦人の注意をこの方面に向けんことを望むもの豈予一人のみならんや。

質疑 應答

問 北海道地名をアイヌ語に依つて解説した著述を示して下さい。(岩見澤 細坂巖)

答 次の三つがあります。

一、永田方正 北海道蝦夷語地名解

二、バッチエラー アイヌ・英・和辭典及アイヌ語文典

(Rev. John Batchelor: An Ainu-English-Japanese Dictionary) 再版一九〇五年 (此の辭典の第二部アイヌ語文典中第一章緒論の第五節に地名解第二百五頁一六一頁あり)

三、磯部精一 北海道地名解 大正七年

此等は皆單行本です、その他、吉田東伍大日本地名辭書を參照することが必要です。島居龍藏氏千島アイヌ中には千島の地名解が載せてある。(文庫生)

問 Muculava は安山岩の急激に冷却凝結したる結果玻璃狀をなしたるものか(佐藤氏)或は火山灰や火山岩の破片などが水と共に流れたるものか(神保氏)(鹿兒島目野生)

答 阿蘇外輪山基底の火山を除外して此の外輪山を構成する全部の岩石を稱して Muculava とするならば Muculava の成因は未だ確定して居らないのであるが「地理教育第三卷二百十九頁―二百二十五頁」に亘る松本教授の論説を精讀せられるならば其の成因に對するヒントを得られる事と思ふ。「所謂阿蘇熔岩の中には種々の型があるのみでなく殆んど常に火山灰を伴ひこれに移化して居る。實際熔岩とつかず火山灰とつかぬ中間物が多々あるのである。」(二百二十一頁)か

ら質問者自身が先づ *Mud-lava* なる名稱を以つて如何なる外觀をなす岩石を指示するかによつて佐藤教授及び神保教授の説が或は充分であり或は全く不充分であり得る。(H)

問 琉球諸島の構造 に関するリヒトオーフエンの意見

答 一九一七年に矢部博士(イ)が概要を報告批判せられた。精しくは一九〇二年のリ氏(ロ)の報文を見られたい。琉球諸島の地質に關しては Döderlein, Suess, 小藤、吉原(徳永)諸氏の研究があつてリ氏は大體それ等を基礎とし、更に新しい意見を述べた。即ち琉球諸島は一千百呎乃至一千二百呎の長さを有する一列島彎であつて、淺き東支那海と深き太平洋との間に存在し凸面を南に向けてゐる。諸島は種子島屋久島馬毛島等よりなる大隅群島、大島沖繩島等より成る大島沖繩群島、宮古島石垣島西表島與那國島等より成る先島群島の三群島から成立し、各群島の間には陸地に乏しい部分がある。これ等群島は列島彎の外帯をなし、種子、屋久、大島、

沖繩の諸大島は主として古生層及それを貫く花崗石によりて構成せられ、種子、鬼界、沖繩の諸島の外部には第三紀層がある。先島群島は古生層に乏しくて主として第三紀層によつてつくられる。外帯は亞細亞大陸の外縁をなし凸面を太平洋に向け横壓力がこの方に向つて加へられたことを示してゐる。内帯には火山帯がある。火山は鹿兒島灣の北から櫻井、開聞嶽を経て竹島、硫黄島、島島、衆島に至り更に臺灣北方海中のアゲンコルト、ビナクル諸島に連る。

かくの如く琉球彎は第三紀層及古生層よりなる外帯と火山

帯よりなる内帯とが帶狀に排列するが、その方向は北部は南北性、南西部は東西性が卓越してゐる。今、臺灣の構造を見るに東には第三紀の臺東山脈があり、中央には結晶綱岩、古生層の臺灣山脈、更に西には澎湖諸島をつくる火山岩があつて、これ等は略南北(北二〇度東)に並んでゐる。然るに北部ではドーム角からカリ山に至る以北は東西性を帯び琉球西部の連續を示してゐる。九州に於ても南部は斷片的ではあるが古き岩層は北二〇度東の方向に排列し、南北性を示して琉球北部の連續を示し、紀伊、四國に見る如き東西性は南九州には認められない。阿蘇大火山も琉球内帯火山の連續で南北弱線に沿ひて噴出したものである。故原田博士、伊木博士其他多くの日本地質學者は阿蘇大火山は瀬戸内海の延長と考へられる。東西の弱線に噴出したものであると考へる。この點はリ氏と大いに意見を異にしてゐる。J. ホッペン(ハ)の記載する(東亞の構造地理一九〇四)をも參考された。

(イ) Yab, H.: Problems concerning the Geotectonics of the Japanese Islands; Critical Reviews of Various Opinions expressed by Previous Authors on the Geotectonics. Sci. Rept. Tohoku Imp. Univ. Second series Vol. IV, No. 2 1917.

(ロ) Richtofen, F.: Geomorphologische Studien aus Ostasien.

III. Die-morphologische Stellung von Fosmosa und den Riukiu-Inseln, Berlin, 1902,

(ハ) Hobbs, W. H.: Tectonic Geography of Eastern Asia, American Geologist. Vol. XXXIX pp. 371-374, 1904. (七卷)